り基本的な研究方向ではないかと思考する。

II章以下の記述の中にも，もう少しつっこんだ説明をうかがいたいと思う箇所がないわけではない。が，それらは「序節」の記述を含めて，本書の側から投げられた問題提起ともいえるのであり，紹介者としては，それらの諸問題をめぐって，今後論争が起こるような情況を期待したい。コンパクトにまとまった近世歴史地理学のテキストを紹介するにあたって，そう思うのである。　　（足利健亮）

J．プズー＝マサビュオ著，菊池一雅・北川光兒共訳　新朝鮮事情：文庫クセジュ669，白水社，1985年，新書判，148頁，750円

文庫クセジュの669として出された本書は，日本にもなじみの深いフランスの地理学者J．プズー＝マサビュオ氏による朝鮮地誌で，原題は“La Coree（朝鮮）”である。日本人にとっての朝鮮は，まだまだ「近くて遠い」という形容のあてはまる地域であり，本書は同文庫クセジュで出している李玉著・金容権訳の『朝鮮史』（白水社，1683）とともに，その平易な概説書として歓迎されよう。もちろん，朝鮮に関する情報は，ここ数年来，拡充が著しく、個々のトピックについては，本書よりもさらに踏み入んだ生々しい情報に接することも不可能ではない。しかし，本書は朝鮮の自然・人文の地理的基礎について，適切なデータと解明を示し，興味本位に堕することなしに、節度をもって，手ぎわよくまとめている点で，やはり貴重な存在といえる。

全体は4部からなり，第1部で国土と住民，第2部で経済のあゆみを概観したあと，第3部および第4部で大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の経済・社会・諸地域の状況について解説するという構成になっている。文庫本という性質上，学術用語の多用やデータの羅列は控えてあり，文体も読みやすいものになっているので，一般読者にも受け入れられよう。

ただ，評者としては，朝鮮についてのまとまった地理的知識が得られるという点もさることながら，本書に垣間みられる「欧米の目」の方に，より興味を覚えた（著者自身はもちろん，著者が主要参考文献にあげているのも，ほとんどが欧米人によるものである）。この「欧米の目」を感じさせる場面はいくつかあるが，ここでは，そのうちの二つについて述べてみたい。

その一つは，朝鮮という地域の特徴を浮かび上がらせる際の描写の濃淡である。半島国イタリアという身近な比較材料をもつフランスにあって（ただし，イタリアと朝鮮の比較はあまり前面に出てこない），極東の一地域に目を向ける著者と，共通点の多い隣邦に住み、自国との差異をきわ立たせることによってこそ、朝鮮の地域像をよく理解できる我々日本人とでは，描写の重点の置き方に差が出るのは当然であろう。たとえば，気候，稲作，田園風景等に関する本書の記述は，我々日本人にとって、朝鮮の輪郭を今一つ明確にしてくれていないようにも思える。

しかし，多少逆説めいた言い方になるが，我々が本書を読む意義は，こういう点にもあるのではなかろうか。我々が自明のこととして通りすぎがちな事象についても，丁寧な描写がなされ，言葉の選び方一つにも，日本語の慣用とは異なった趣きがあったりして，あらためて新鮮な印象を受けることがある。また，文体そのものは平明でありながら，あえて日本的な語彙に近づけすぎていない訳文も，そうした良さを伝えるのに役立っている。

二つめは、朝鮮という対象との距離のとり方である。近・現代の朝鮮を語る上で避けて通れない日本の植民地統治や南北分断問題は，日本人にも，また韓国・朝鮮人にも直接・間接にさまざまな影を投げかけており，こうした問題について，どちらに向かっても，常に率直かつ公正な態度を保ち続けるには，相当の困難が伴うことが少なくない（1984年に出た魚塘著『朝鮮新風土記』は，自身の故国を扱っているだけに，実体験や深い理解に裏づけられた記述に富み，得るべきものは多々あるのだが、評者がこれを両手を挙げて推奨するのをためらう理由は，この距離のとり方に難があって，せっかくの労作を損う部分が散見されるからである）。その点，本書はそういう困難をある程度免れえているといえよう。南北のどちらにも，また日本にも，淡々と，しかし，率直な指摘を行っている。

ただ，それでもなお，この分断国家の記述には，実体に手の届かないもどかしさが，依然として，つきまとっている。もちろん，それは著者の責に帰するものというより，対象に自由に踏み込んで，同じ精度，同じ距離感で観察したり，公式発表なり資料なりを同等の水準で比較・照合して論じたりしにくいという現在の状況に由来するところが大きいとみるべきであろう。その意味で，地理学研究の対象としての朝鮮の全体像は，まだまだ「近くて遠い国」

のそれである。

ともあれ，本書は，朝鮮の地理に関する平易で優れた概説書であるとともに，ラウテンザッハ，マッキューン，バーツらの著作が，我々にとって必ずしも身近な存在とはいえない今日，欧米人の目を通して見た朝鮮像に手軽に接しうる良い機会を与えてくれるものといえよう。　　（佐々木史郎）

Cosgrove, D. E. : Social Formation and Symbolic Landscape （社会構成体と象徴的風景）293 p. 1984, Croom Helm

ベニスは女性性器のシンボリズムを持つ landscape である，という大胆な発想を展開した Cosgrove[1] が，マルクス主義地理学者としての立場で，「風景」 landscape の歴史を跡づけようと試みたものが，本書である。これに先立つ論文の一節で Cosgrove は，「もし彼ら（地理学者）が，美術史家あるいは文学史家並みの学問的能力を身につければ，地理学者は，絵画や詩，散文における風景の想像力に富んだ表現を通じて，風景における人間の主観性理解に，多くをもたらすであろう。[2]」と述べた。まさにこの主張を実践する目的で本書はまとめられたものである。

ルネサンス期に到ってはじめて，外部世界に向けられた人間の感受性は変化をとげ，ここに風景が成立する。ルネサンス以降、イタリアからフランドル，そして西ヨーロッパ全体へと広まった文化的概念としての「風景」の諸起源と発展とが，本書のテーマである。より具体的には，15世紀初頭から19世紀後半に到る，封建制から資本主義への移行期において，それぞれの社会構成体の物質的生産との関連で，文化的生産としての風景概念が論じられる。

この立場は，風景を，もっぱら土地利用として研究する「地理学的」アプローチと，絵画や文学に表現された風景を芸術的に研究するアプローチとを統合するものである。一応，通史という形をとってはいるが、本書は，既に発表されたいくつかの論文を寄せ集め、それに手を加えてまとめられたものである。従って，章によって，内容の密度や論旨展開の明確さに，大きな隔たりがあることは否めない。ここでは各章を紹介した後，いくつかのコメントを加えたい。

第1章では，風景の概念が検討される。風景は主観的な人間の経験を通じて媒介される外部世界を示す，という点で，他の空間単位（例えば region や area）とは異なっている。風景は世界を見るものの見方であり，イデオロギー的なものである。「風景は，ある階級の人々が，自分たちと自分たちの世界とを，自然との想像上の関係を通して意味づけてきたやり方であり，それを通して外部世界の自然についての自分たちの社会的役割と，他の人々のそれとを強調し，結びつけてきた方法を表現している」（p. 15）。

しかし風景の持つ二重の意味からも明らかなように，風景は，主観的，個人的であるばかりではなく，人間集団が自然を改変した結果としての景観という意味からは，客観的，社会的なものでありうる。そしてこの二重のあいまいさが，風景概念には常につきまとっている。

風景画が最初に生まれたのは，15世紀のフランドルと北イタリアであったが，真の意味での風景概念の成立は，空間を支配し，秩序づける透視図法が確立したイタリアにおいてであった。Brunelleschi によって発明され，Alberti が理論化した透視図法は，単に技術としてのみならず，真実そのものとして当時は受け入れられ，20世紀初頭のキュービズム出現までの間，空間表現となってきた。J. M. W. Turner でさえ，王立美術院での資格は，「透視図法教授」であったほどだ。

透視図法の特徴は，第1に，歴史の流水をある特定の時点に静とさせ，その時点を普遍的な現実として凍結させること。第2に普遍的世界を，唯一の観察者が構造化し，指示することによって，それが表現する対象にとっての，唯一の外部的な主体を認めること，である。一方，地理学と風景という点では，実証主義的な地理学はいうに及ばず，風景を静的に統合された全体として把握しようとした20世紀初頭の Sauer の景観形態学や，Vidal de la Blache の region 概念においても、研究者の目は風景内部における主体を欠いた，外部者のそれに留っていた。風景に対するこのような視点は，まさしく透視図法が風景画にもたらしたものと一致する。さらに，風景における内部者を重視する近年の人文主義地理学に共感を示しつつも， Cosgrove は，この傾向が，現実世界の中での人間の思想と活動との間の弁証法的な例面を拒否するものである，という批判を行うのである。

この文化生産と物質生産との弁証法的な発展が，